

ブルーストの手紙

— 『失われた時を求めて』における手紙の機能 —

田 中 良*

Les lettres dans *A la recherche du temps perdu*

Ryo TANAKA

要 旨

マルセル・ブルーストは生涯に約6000通の手紙を書いているが、それほど彼は手紙を偏愛していた。彼の小説『失われた時を求めて』が実人生をなぞった物語である以上、この小説に手紙が多く出てきても不思議はない。しかしその働き、意味するところは他の作家の場合とかなり異なる。一般に手紙は、物語の発端となったり、それを締めくくったり、時にはその流れに大きな変化を与えたりする。つまり、小説の構造、物語の流れと密接な関係にあるといえる。それに対し、ブルーストの小説では、このような働きはせず、本来他者とのコミュニケーションの手段であるはずの手紙が、逆に他者とのコミュニケーションの困難を表している。小説ではしばしば、手紙は行き違い、偽装され、逸脱する。差出人の意図に拘束されることなく、意外な結果を導き出している。それがブルースト独自の一つの世界を形成していることは事実であるが、そうした手紙の否定的な側面の強調は、他者との精神面での不一致、ずれを表していることも忘れてはならない。

はじめに

フィリップ・コルブ編集による『ブルースト書簡集』全21巻が完結することにより、ブルーストが生涯に書いた手紙のほぼ全貌が明らかになった。その収録数は試算によると、ブルースト以外のものも含めて5349通¹⁾、未発表のものも含めると約6000通にのぼるのではないかと推測される。セレスト・アルパレの証言²⁾を引き合いに出すまでもなく、この膨大さそのものがブルーストの手紙への偏愛を物語っている。手紙をこれほど愛した作者の小説『失われた時を求めて』が作者の人生を半ばなぞった物語である以上、そこに多くの手紙がでてきても不思議はない。しかしその働きは、他の作家の作品とかなり異なっている。ブルーストの作品を検討する前に、バルザック、スタンダールなどフランス19世紀の作家たちのいくつかの小説を取り上げ、その中で手紙の働きを検討することから始めたい。当然のことながら、書簡体小説は

対象から外す。

バルザックの作品では、『谷間の百合』と『十三人組物語』中の一編『フェラギュス』の中で手紙は効果的に使われている。『谷間の百合』はフェリックスから恋人のナタリーへの手紙に始まり、最後はモルソー夫人の告白の手紙、さらにナタリーからの返信で締めくくられる。『フェラギュス』は、ジュール夫人と徒囚の父フェラギュスとの密会を夫のジュール氏が妻の不貞と誤解したとに始まる悲劇であるが、この物語も、一人の青年士官がある日偶然フェラギュス宛の恋文を拾い、それをジュール氏に渡したことに端を発している。スタンダールは、彼の実人生における複雑な政治的背景の影響もあってか、偽手紙の使用に巧みであった。『赤と黒』では、マチルドと結婚直前にあったジュリアンがレナール夫人の告発の手紙を読むことによって、物語は急転直下破局へと向かう。周知の通り、この手紙は夫人が神父に強制されて書いたもので、言うなれば偽手紙であった。この物語ではこの他にも、レナール夫人とジュリアンの関係を暴露する匿名の手紙、その疑惑を晴らすためジュリアン本人が書いた匿名の手紙、またマチルドの気をひくためだけに書かれたある女性へのジュリアンの恋文など、手紙が巧妙に織り込まれている。『パルムの僧院』でもファブリスが逮捕されるのは偽の手紙でおびき出されたため、パルム大公もサンセヴェリナ公爵夫人とファブリスの中を暗示する匿名の手紙をモスカ伯に送らせ、伯爵の嫉妬をあおっている。目を他の作家に転じると、例えばデュマの『モンテ・スリスト伯』ではマルセイユの一等航海士エドモン・ダンテスがイフ城に投獄されるのは、彼を嫉妬する知人による誣告の手紙が原因であり、ミュッセの『世紀児の告白』では、恋人ブリジットが書いた別の恋人への手紙を偶然読むことで、ついに主人公は彼女と別れる決意をする。プーリジェの『弟子』では、死んだ妹の仇を討つため、兄アンドレは彼女の死の真相を隠しているが、匿名の手紙によりもう一人真相を知る人物がいることに驚愕し、ついに法廷で、死の前日自殺を決意した彼女の手紙を受け取ったこと、そしてそれを燃やしたことを告白して物語は終わる。

このように小説に出てくる手紙は、小説の構造と物語の流れと密接に関係していることが多い。たまたまフランス19世紀の小説を例に挙げたが、これに限らず一般的にも小説中の手紙は、物語を始めさせたり終わらせたり、時にはそれに大きな変化をあたえたりする場合があるように思える。こうした傾向に対し『失われた時を求めて』では手紙はかなり異なる様相を見せている。端的に言うと、そこでは手紙は小説構造に関わることもなく、物語の流れを変えることもない。ではどのような働きをしているのか、あるいはどのような意味作用を担っているのか。

その考察にあたり、『失われた時を求めて』における様々な手紙を特性別に次の三つのカテゴリーに分類する。「行き違う手紙」(第1章)、「偽装された手紙」(第2章)、「逸脱する手紙」(第3章)である。

I. 行き違う手紙

『失われた時を求めて』における手紙はしばしば、差出人と宛名人の間に感情、欲望といった精神的な面での一致が見られず、両者が何らかの理由で行き違っている。フランス語で言えば、両者がうまくコレスポンドル(coppespondre)していない。プーリジェは、どんな善良な人でも他人の気を悪くさせたり怒らせたりすることがあるという話から、手紙を例に取り上げ次のように述べている。「…また他の人は、もし手紙が相手に関係があつて自分には関係のない時には、何ヶ月も返事をしなかったり、あるいは何かの頼み事のために来るというので、留守になってはいけないと思ひ外出を控えていると、やって来ないで何週間もこちらを待たせ

てしまう。後者はこちらからの返事がなかったからと言うが、彼らの手紙は元々返事など求めていなかった。そしてこちらを怒らせてしまったと思ひ込む。」(Ⅲ, p.101)³⁾ここで述べられているのは、差出人と受取人の間に生じる行き違いに対する苛立ちである。

待っても来ない手紙はこの一種である。主人公はジルベルトに恋しているときは、彼女の手紙を運んでくるはずの郵便配達人を「心をときめかせながら」(Ⅰ, p.578)待ち、ゲルマント公爵夫人と近づきになりたかったときは、主人公に会いたいという公爵夫人の手紙を甥のサン・ルーが受け取ることを期待していた。そのサン・ルーも恋人ラシェルからの手紙を「手紙!手紙!」(Ⅱ, p.421)とつぶやきながら待っている。しかし期待する手紙は、いくら待っても彼らのもとは届かない。このように手紙が来ないのは、彼らの欲望と相手のそれが一致せず、ずれているためである。しかし全く来ないわけではなく、ジルベルトから届いた招待状のように「奇跡」が起こることもある。「人生には、恋する者がいつも期待している、こんな奇跡がばらまかれている。」(Ⅰ, p.491)確かにばらまかれているのかもしれない。スワンも、彼を無視してヴェルデュラン夫妻たちと旅行に出掛けたオデットから、彼が前日予想した通りの無心の手紙を受け取っている(Ⅰ, p.296)。確かに「奇跡」はあるのかもしれないが、それらは極めて例外的なことで、概してこの小説では待っている手紙は届かない。

アラソ・ビュイジヌも指摘する通り⁴⁾、手紙は来るとしても期待に反しているか、時宜にかなっていない。ステルマリア夫人からのキャンセルの手紙は、期待に反した手紙の典型である。サン・ルーの仲介でステルマリア夫人とブローニュの森で夕食を共にすることになった主人公は、高揚した気持ちで待ち合わせ場所に出かけようとしている直前、彼女から断りの手紙を受け取る(Ⅱ, p.686)。またバルベックで、クリームを届けてくれた少女からの手紙と思っただのは、実はベルゴットが通りすがりに書き残したものであった(Ⅱ, p.74)。時宜にかなっていないのは、「パリで最も美しいと評判の」、ゲルマント公爵夫人の姪からの「愛の告白の手紙」(lettre de déclaration)(Ⅳ, p.33)である。主人公がこの手紙を受け取ったのは、ちょうどアルベルチヌが出奔して数日たった頃で、彼はそのとき彼女の様子を探りに行ったサン・ルーからの報告を待っているところだった。だから、「公爵の姪が書いてきたことは、アルベルチヌに会いたい気持ちにさせるだけだった。」この手紙は、いかにも時機が悪かった。別の時ならこの手紙も別の結果をもたらしたかもしれない。ではなぜ作者がこのゲルマント公爵夫人の姪という、これまで一度しか言及されたことのない女性⁵⁾(Ⅲ, p.695)の、しかも「愛の告白の手紙」をここに登場させるのか。これは一見唐突に見えるが、様々な人間の抱く欲望のずれを強調したいという作者の仕掛けであることは明らかである。スワンも一度、オデットへの手紙に関して時機を間違ったことがある。ある時、スワンは約束の日には会えないとオデットに手紙で知らせるが、それとちょうど入れ違いに、会う日をずらせてもらいたいという彼女からの手紙が届く(Ⅰ, p.300)。それにより鎮まっていた彼女への疑惑と苦痛が再燃する。時機のずれは時に、ユーモラスなエピソードとして現れる。主人公はある日スワン夫人から昼食会に招かれ、サロンに入る手前でボーイ長から長い封筒を渡される。帰宅して封筒を開けると、彼がエスコートすべき女性の名前が書いてあったというもの(Ⅰ, p.565)。このエピソードは、社交生活に関する主人公の無知を揶揄したものであることに違いないが、時機を逸した手紙のテーマ系にも属している。

時宜にかなっていない手紙のテーマは、『楽しみと日々』以来ブルーストが追い求めているものでもある。この中の一つの小話では、少女ヴィオラントがオノレという一人の年上の男の子から性的快楽を教えられ、その翌年、彼が水夫として航海にでるのを知ったとき、彼に会いたいという手紙を書くが、届いたのが出航の1時間前で帰国は4年後になるという⁶⁾。その後、

彼女は官能の世界におぼれて行く。もう一つの小話では、ド・ブレーヴ夫人は醜くて頭も良くないド・ラランド氏が気に入り始めたため、友人に頼んでランデ・ヴーのための手紙を書いてもらうが、返事ではド・ラランド氏は二日前に他のところに出発したという⁷⁾。会えないとわかればなおさら、彼女の恋情はかき立てられてゆく。このテーマは『失われた時を求めて』では、アルベルチヌの死の知らせの場面(Ⅳ, pp.58-60)で見事な発展をみせている。主人公は、叔母の家に戻ったアルベルチヌを様々な策を弄して呼び戻そうとするが万策尽き、ついに虚栄心を捨て率直に戻ってきてくれよう電報を打つ。ところがそれと入れ違いにボンタン夫人から姪の落馬の知らせが届く。さらに、悲しみに沈んでいる最中、死の直前にアルベルチヌが書いた2通の手紙が届けられる。その一通では、アンドレを選んだことを喜び、一日遅れの日付になっているもう一通では、もしまだアンドレに連絡していないなら、自分が戻ることに同意してほしいと懇願している。これらの手紙は見事に時機を逸し、悲劇的に行き違っている。これは単に手紙の上だけの話ではなく、感情、欲望といった精神的な面での他者との不一致、ずれの感覚を表したものである。

Ⅱ. 偽装された手紙

手紙では、率直に心情が吐露されることなく、それは何らかの理由でしばしば偽装される。主人公はスワンに誤解されていると思い、その誤解を解くため「真実を満載した、16ページにわたる」手紙をジルベルトに託すが、彼女から直接返却される。ジルベルトによると、それを読んだスワンは「これは何の意味もない。私が正しいことを証明しているだけだ」と言ったという(Ⅰ, p.482)。この「16ページにわたる」手紙は奇妙なことに一行たりとも読者には示されていないが、恋愛経験の先達スワンには、彼に気に入られようとする少年の、欺瞞、虚栄といった偽りの「真実」が十分読み解けたのであろう。このような偽装は特に恋人への手紙でなされ、ジャン＝イヴ・タディエはこれを「愛の戦略」(*stratégie amoureuse*)と呼んでいる⁸⁾。スワンもシャルリュスもこの「戦略」上、偽装された手紙を書いている。スワンは、単調化しつつあるオデットへの恋を活性化するため「見せかけの失望と偽りの怒りに充ちた手紙」(Ⅰ, p.222)を送りつけ、シャルリュスも同じように、モレルが彼の誘いを断って立ち去ったので、彼を呼び戻すため架空の決闘を捏造し、「8ページ」から成る手紙を主人公に託している(Ⅲ, pp.450-454)。主人公は、彼ら以上にこの戦略には長けている。ジルベルトに会いたいにもかかわらず、「私はジルベルトにもう会わないという手紙を書いた。その理由として、二人の間に全く架空の、ある不可解な誤解をでっち上げ、それをほのめかしておいてジルベルトの方からその説明を求めてくることを期待した。」(Ⅰ, p.621)叔母の家に戻ったアルベルチヌから、なぜ自分で来ないでサン・ルーを寄こしたのか、もし主人公自身が来ていたら喜んで帰ったのに、という恨みの電報を受け取ったとき、それに対して主人公は嘘で固めた返事を送っている。彼女が出ていった日の前日母から結婚の許可を得ていたこと、ヨットもロールス・ロイスも準備できていること、サン・ルーが行ったことは知らなかったことなど、自虐的なまでに嘘をつく(Ⅳ, pp.36-39)。

手紙における偽装は、愛のためだけでなく、虚栄心や政治的陰謀からもなされる。ジルベルトは、大戦勃発後なぜパリを棄て故郷のタンソンヴィルに戻ったかを、大戦勃発直後とその二年後の二度にわたり主人公に手紙で説明しているが、その二つの説明が食い違っている。最初の手紙では、パリを離れたのはドイツ軍の空襲から逃れるため、その避難先の故郷にも二日後にはドイツ軍がやってきたと報告している(Ⅳ, p.330)。それに対し二年後の手紙では、

タンソンヴィルがドイツ軍に占領されているのは知っていたが、愛する故郷が脅かされ、館には年老いた管理人一人しかいなかったのが敢て戻ったという（IV, p.334）。最初の手紙の自然さ、合理性を考えれば、二番目の手紙が偽りであることがわかる。ジルベルトは主人公に限らず、他の人にも二番目の報告をしていたようで、その結果、彼女の行為は新聞で最大の賛辞を込めて語られることになる。彼女はそのことを予見して、虚栄心、自尊心から事実を偽ったと考えられる。一方、政治的陰謀とはサン・ルーのスパイ容疑である。あるドイツ将校の手紙の中にサン・ルーの名前が見つかり、彼はスパイ容疑をかけられるが、即刻事実無根と判明する（IV, p.389）。彼が無実である限り、この手紙は明らかにドレフュス事件の「アソリの偽手紙」同様、政治的陰謀から仕組まれたものである。

偽装は、内容に対してばかりでなく、手紙を書いたり受け取ったりする行為、状況に対してもほどこされている。主人公はアルベルチヌがトロカデロに出かけた後、そのマチネには女優のレアが出演することを知り、急いで彼女を呼び戻しにかかる。そのときフランソワーズに託した「言付け」（un mot）には、バルベックにいる彼女の知人から手紙をもらい、気が動転しているので帰ってきて欲しい、という虚偽の内容が綴られていた（III, p.658）。彼は受け取っていない手紙を受け取ったことにして、彼女を呼び戻そうとしているのである。逆に、受け取ったにもかかわらず受け取っていないふりをしたこともある。ポンタン夫人宅に戻ったアルベルチヌとの手紙のやりとりの中で、ロールス・ロイスの車のキャンセルは自分がするというアルベルチヌからの手紙に対して、それでは事態は好転しないので、それを受け取っていないふりをして、アンドレに来てもらうことにしたという嘘の返事を書いている（IV, pp.50-52）。書くふりをするときもある。それはアルベルチヌの場合で、アンドレと主人公のベッドで戯れていた直後主人公が突然帰宅したため、彼女は「自分のベッドの乱れを見られないように私の部屋に行き、手紙を書いているふりをした。」（III, p.565）

このように『失われた時を求めて』では手紙にしばしば偽装がほどこされているので、受取人によっては意味そのものが伝わらない場合も当然出てくる。バルベックのホテルのボーイ長エメにはシャルリュスから手紙の意味がわからない。このボーイ長は主人公が初めてこの海辺を訪れたとき男爵から手紙をもらい、主人公が二度目に訪れたときにその文面の解説を主人公に依頼する。男爵はその手紙で、エメが自分の死んだ知人に似ているので、交際してお金を上げようと思ったが三度の呼び出しに応じなかったため別れねばならない、と言いつつ自分に会える場所と時間を指示している（III, pp.380-382）。男爵と同じ趣味の男なら、この長い手紙に隠された裏の意味を難なく読みとったはずであるが、あいにくエメは通常の間人であったため、男爵の意図は全く通じなかった。偽装工作ではないが、自分の意図を直截的に語らないという意味ではブルースト自身の手紙にもそれと似たことがある。特に交渉事や苦手な人物に対する手紙の時、彼はストレートに自分の言いたいことを言わないため、文章は紆余曲折する。出版社のベルナル・グラッセがブルーストを「パリで最も複雑な人間」⁹⁾と評し、ロベール・ドゥ・モンテスキュウがブルーストの手紙を「少し意味不明な渦巻き状の香りを持つ」¹⁰⁾と皮肉ったものもそうした経緯からであろう。

このようにしばしば手紙が偽装されるのであれば、手紙への不信、疑惑が生まれても不思議はない。ゲルマント大公夫人からの招待状が本物かどうかゲルマント夫妻に確かめるため、夫妻の帰りを待っているという場面がある（III, pp.855-859）が、なぜ主人公はその招待状を疑うのか。主人公自身は、大公のような王家に属している、排他主義と偏見に充ちた大貴族が自分のようなものに招待状を出すはずがないから疑わしいとしているが、読者にすれば、大公のいとこのゲルマント公爵や血縁にあたるヴィルパリジ公爵夫人のサロンに出入りを許されて

いる主人公に、大公から招待状が届いてもそれほど不自然ではない。確かにプルースト自身、アントワーヌ・ビベスコの名前でフェヌロン宛に偽手紙を書いた経験¹¹⁾もあり、反対にプルースト自身がリュシアン・ドーデから偽の招待状を受け取ったこともあるらしい¹²⁾。アルベール・フィユラは、このリュシアン・ドーデからの偽の招待状にこの招待状に対する疑惑の源泉を求めている¹³⁾が、確かにそうした経験の影響は否定できない。しかしそれだけでは他の偽装に対する説明にはならず、やはりそれに加えて、手紙という通信手段に対する不信、疑惑を考慮に入れなければならない。なぜなら手紙の偽装は、手紙に対する不信、疑惑と表裏一体の関係にあるのだから。

III. 逸脱する手紙

『失われた時を求めて』におけるいくつかの手紙は、時間、空間、郵便経路、さらに差出人の意志にさえ拘束されることなく逸脱する。

手紙は通常、同一時間、同一空間を共有する存在に対して必然性と有効性を持つものだが、この小説の手紙はそうした一般的な約束事に縛られない。例えば、話題にされる三通の古い手紙がある。一通は、主人公の祖父がスワンからかなり以前もらったという手紙。そこでスワンは妻をもう愛していないと言っていたという (I, p.34)。もう一通は、ゲルマント公爵が古い手紙の中から見つけたという母の手紙。公爵は、その手紙の中で弟のシャルリュスに優しいことが書いてあると本人に直接伝えたとき、つい口が滑り弟の性癖に触れそうになる (III, p.115)。三通目は、シャルリュスの死後10年たってから発見され主人公宛のもの。その出されなかった手紙で男爵は、モレルへの殺意とその断念、さらに自らの自殺をほのめかしている (IV, pp.384-385)。そして、それを読むことによって主人公は、当時のシャルリュスに対するモレルの恐怖心を理解する。これらの古い手紙は、色褪せることなく、別の時代に新たな光を投げかけている。

手紙は空間的な制約を受けることもない。前述した通り、主人公はアルベルチャーヌが死の直前に書いた手紙を彼女の死後に受け取っている (IV, pp.59-60) が、それはいわば死者からの手紙であり、同一空間を共有しない存在からのメッセージである。手紙はどこまでも逸脱し、死さえそれを止めることはできない。

手紙は一般に、差出人が書き、ポストに入れるか直接相手に届け、そして宛名人が読むという経路をたどるが、この経路もしばしば守られない。アルベルチャーヌが今日にでも逃げ出すのではないかと不安な日々を送っていた頃、主人公は「間違っ」彼女宛の手紙を読んでいる (IV, p.10)。そこには逃亡計画とともれるようなことが書かれていたが、実はそれは同じ建物に住むもう一人のアルベルチャーヌ宛だとわかる。この手紙は宛名人に正確に届いていないということである。たとえ正確に届いたとしても、ジルベルトの電報のようにアルベルチャーヌからのものと誤読される場合もある (IV, pp.220 et 234)。

この小説では、往復書簡になることはない。例外的に主人公と出弄後のアルベルチャーヌは手紙を交わしているが、主人公の作為と偶発事が重なって、内容がかみ合った往復書簡にはなっていない。ほとんどの場合、死亡通知のような一方通行の手紙になっている。もし往復するとすれば、それは出されたものと同じ手紙である。主人公がスワンに宛てた自己弁護のための「16ページにわたる」手紙、これは前述した通り、ジルベルトから直接主人公に返却されている (I, pp.482-484)。もう一通はある将軍からサン・ルー宛のもの。その中で将軍はかねてからサン・ルーから問い合わせのあったモレルに関して、彼の脱走と逮捕を報告し、その処

罰を問い合わせていた。ところがこの手紙は「受取人死亡」で將軍の元に返送されている（IV, pp.431-432）。この二通の手紙で興味深いのは、共に意外な結果を伴っていることである。主人公の手紙はシャンゼリゼ公園でシルベルトから戻されているが、そのときその手紙を奪い合う戯れの中で二人は共に性的快楽を味わっている。スワンに全く通じなかった「真実」の手紙は、全くの別の形で二人の間に一種のコミュニケーションを作り出したことになる。もう一通の返送された將軍の手紙に関しては、將軍はモレルの処罰に困り、とりあえず彼を戦場に送り返す。そして驚くべきことに、その戦場でモレルは活躍し、勲章までもらってしまう。

前述した手紙の誤配、誤読、そしていま述べた返却される手紙とも、決して異常な事態ではないが、その多様性の中にブルーストにおける郵便経路の逸脱に対する関心が読みとれる。中でもブルーストが最も関心を寄せたのは、盗み読みである。

手紙の盗み読みは、本来読むべき宛名人とは別人が読むという意味で、郵便経路の逸脱の一種である。『失われた時を求めて』の手紙では多くの場合、偽装、誤読、誤配など様々な理由で、真実は語られない。もしその真実を読み解く者がいるとすれば、それは宛名人ではなく、それを盗み読んだ者である。盗み読みと聞いて『失われた時を求めて』の読者が最初に思い浮かべるのは、言うまでもなくスワンのものである。ある日スワンはオデットに数通の手紙の投函を依頼され、そのうちフォルシュヴィルへの手紙だけ自宅に持ち帰り、ろうそくの光に照らして透かし読む（I, pp.277-279）。それによってスワンは、自分が訪問中にベルを鳴らしていたのはやはりフォルシュヴィルで、自分だけでなくフォルシュヴィルもまた自分以上に騙されていることを知る。また、たとえ真実が語られているとしても、盗み読まれた手紙はもう一つ別の真実をあぶり出す。シャルリュスは女優レアからのモレル宛の手紙を盗み読み、二人の関係を知ることになる（III, p.720）が、その手紙でレアは真実を語っているのかもしれない。しかしその手紙は、モレルの裏切りというもう一つの真実をシャルリュスに突きつけている。主人公もまた召使いがいとこに宛てに書いた手紙を盗み読み、その召使いの隠された文学趣味を知る（II, pp854-855）¹⁴。スワンに関するエピソードの一つに、次のようなユーモラスなものがある。彼はある時期、主人公の祖父のいとこ親密で毎晩のように夕食に来ていたが、ある時からぱったりと来なくなった。病気かと思い、誰かを使いに出すため配膳室に入ったところ、料理女に宛てたスワンの別れの手紙が見つかる（I, pp.191-192）。それが別れの手紙であるとわかったのは、いとこがそれを無断で読んだ証拠であり、それによりスワンのもう一つの真実が明るみにでている。フランソワースなどは盗み読みをしなくても、主人公の母への手紙なら「5分間ほどその封筒を眺めた」（I, p.30）だけで内容を察してしまう。「彼女は私たちにはとらえられない記号を解読して、彼女に隠した真実をすぐ見抜く。」このとき彼女の見抜いたのは、手紙の内容以上に、母なしでは生きてゆけない脆弱な少年の心であろう。

手紙の盗み読みは、一人称小説の限界の表れでもある。三人称の場合なら、作者は様々な登場人物の手紙を容易に読者に提示できるが、一人称の場合は主人公である「私」の目と耳を通してしか他者の手紙の内容を知ることにはできない。『世紀児の告白』の「私」（オクターヴ）が恋人ブリジットの手紙を盗み読むのはこの制約のためである。もちろん、同様の一人称小説である『失われた時を求めて』もこの制約をうけている。しかしそれは表面上のことで、実際に人を盗み読みへ誘うのは、他者の手紙がまとっている神秘性である。他者の手紙には自分だけに隠されている真実が隠されているのではないか、それを読むことによって真実がわかるのではないか、という思いに誘われて盗み読みはなされる。サニエットはバルベックで、突然主人公を訪れ、奇妙な振る舞いをしたことがある。彼は偶然そのとき主人公の机の上に出ていた、

誰からのものかわからない手紙に心を奪われ、主人公の言っていることにまともに耳をかさず、部屋を整理するふりをしながら、その手紙を手にとったりひっくり返したりしていた(Ⅲ, p.412)。いつものけ者扱いにされている彼だけに、いっそう他者の手紙は神秘的に映るのであろう。そうした手紙の持つ神秘性がこれまでの盗み読みの動機となっていた。しかしアルベルチヌの手紙に対しては違っていた。アルベルチヌは時々、眠るとき余りに暑いと椅子に着物を脱ぎ捨てる。その着物の内ポケットの中に彼女宛の手紙が全て入っていることを知っている主人公は、それらを読めば彼女への疑惑が晴れるのではないか、彼女の嘘を証明できるのではないかと思うが、結局彼は読まなかった(Ⅲ, pp.581-582)。おそらく読んだところで、彼女の真実は見えてこず、疑惑は深まるばかりであることがわかっていたからである。なぜなら、彼女自身が決して盗み読みされることのない、「閉じた封筒」であるから。「私はアルベルチヌを膝にのせ、手で彼女の顔を支えることもできた。頭にキスをし、ずっと手で撫で続けることもできた。しかし、(中略)私は、内部では無限に達しているある存在の閉じた封筒に触れているだけのような気がした。」(Ⅲ, p.888)外部からは彼女の内部には達することができないということ、つまり手紙の盗み読みぐらいでは彼女の真実に近づくことができないという意味において、彼女は特別な存在であった。

逸脱する手紙は少なからずこうした神秘性をまとっている。時間、空間、郵便経路から逸脱し、差出人の意図に関わりなく、予見できない神秘的な力を及ぼしてゆく。

結 び

最初に述べた通り、プルーストは生涯6000通にのぼる手紙を書いたと推定されるが、当時の時代的制約を考慮するとしても、彼の手紙に対する偏愛を認めないわけにはゆかない。ではなぜプルーストはそれほど手紙を偏愛したのか。

セレスト・アルバレはプルースト自身の言葉として「手紙を書くことによってしか世間との接触ができなかった」¹⁵⁾とし、リュック・フレースも「手紙は蟄居したものが外部に自己表明する方法である」¹⁶⁾としているが、それはオスマン通りに引越した後のことで、それ以前から彼は多くの手紙を書き、引越した後もしばしば外出し外部との接触がなかったわけではない。彼の手紙への偏愛は、こうした外的な制約より、内的な欲求から出ているように思える。アラン・ビュイジヌは手紙の性質を抽象的に「不在の在」(y être sans y être)と表現し、「だから手紙はプルーストにふさわしい。手紙によって人は他者から遠く離れていながら近づくことができる」¹⁷⁾と述べている。ビュイジヌの抽象的解釈に間違いはないように思えるが、具体的にはプルーストは直接的な対話より、手紙という間接的コミュニケーションを好んだとも言える。プルーストには、外部の世界と接するとき、その対象との間にクッションとして何らかの仲介物を置くという傾向がある。その傾向は、物に対しては、幻灯、バルベックのホテルの窓に映る海、モンジュウヴァンの池に映る景色などの間接的ヴィジョンへの好みとして、肉親については、親子という直接の関係より、祖母と孫、あるいは叔父、叔母と甥、姪という間接的な方を選んだことに表れている。サン・ルーがしばしば、紹介者あるいは仲介者の役割を果たしているのも、その表れの一つである。『ジャン・サントゥユ』と比較しても、主人公ジャンは、庭で客と談笑している母に窓から直接声をかけるのに対し、『失われた時を求めて』の主人公はフランソワーズに母への手紙を託しているところに、はっきりとその傾向が窺える。

プルーストにとって手紙は、彼のこうした間接性への好みに最も適した通信手段であったことに間違いはない。しかし一方で、彼は間接性に対する不信任感を表明することも忘れていない。

例えば、主人公は劇場ヘラ・ベルマを見に行ったとき、オペラグラスを覗きながら、そこに映るヴィジョンが本物かどうか自問している（I, p.441）。また、サン・ルーは前述したように主人公にとっての紹介者あるいは仲介者としての役目を果たし、信頼に足る人物像を一方では見せながら、それと裏腹の残虐性、スパイ容疑、性的倒錯をまとわされている。これらにはそれぞれ、オペラグラス、仲介者という間接性への好みと同時に、疑惑の目も向けられている。本論で論じた手紙の行き違い、偽装、逸脱は、手紙に対する不信、疑惑と同義語である。彼は手紙を愛しながら、常にどこか不信感を抱いていたように思える。でなければ、これほど手紙の否定的側面を強調することはなかったであろう。確かに、この否定的側面から、予期せぬ出来事、事態が生じて、プルースト独自の世界が形成されることも事実であるが、この不信感単に手紙に向けられたものではなく、他者全体に向けられていることに留意しなければならない。手紙に対する不信、疑惑とは、他者に対する不信、疑惑であり、手紙が行き違い、偽装され、逸脱するということは、他者との関係が常にどこかでずれていて、どこまで行っても合一に達することはないということである。そして、この悲観論が母への全面的な信頼と愛に支えられていることは言うまでもない。

『失われた時を求めて』の祖母、母はセヴィニエ夫人の書簡集を愛読し、娘、息子への手紙の中に引用することを忘れなかった。祖母は、サン・ルーへのお礼として彼の崇拜するプルドンの自筆書簡を彼に見せている（II, p.221）。プルーストは彼女たちの、こうした手紙信仰を決して揶揄していない。ここに彼女たちとの、すなわち実生活上の母との、不信も疑惑もない関係を見るべきであろう。

注

- 1) 保刈瑞穂氏は『プルースト全集16・書簡I』（筑摩書房、1989、p.600）の解説の中で、ゴルフ編集による同書簡集の総収録数を約4300通と推測しているが、それはこの解説が書かれた時点ではまだ第16巻までしか刊行されておらず、残りの5年分をこれまでの平均の通数として加算された結果である。ところが残りの5年間にはそれまでの平均を遙かに超える手紙が書かれたため、保刈氏の予測より約1000通越えることになった。
- 2) 「実際、彼（プルースト）は、手紙を出すのがとても好きでした。」（Céleste Albaret; *Monsieur Proust*, Robert Laffont, 1973, p.245
- 3) 『失われた時を求めて』からの引用は全て、*A la recherche du temps perdu*, tomes I—IV, Pléiade, 1987-1989から。
- 4) アラン・ビュイジヌは、プルーストの手紙はいつもタイミングが悪く（*contretemps*）、時宜を得ていない（*inopportune*）、と指摘している（Alain Buisine; *Proust et ses lettres*, Presses Universitaires de Lille, 1983, pp.92-95）
- 5) そこで彼女は「私はゲルマント夫人の姪ほど美しく高貴で若やいだ人を知らない。」と紹介された後、それほどの美しさをレストランの主任やボーイが理解できないのは、彼らが彼女に対して性的欲望を抱いていないだからとしている。つまり、感覚は純粋ではあり得ず、欲望のような精神的な作用を常に受けているということである。
- 6) Marcel proust; *Jean Santeuil précédé de Les plaisirs et les jours*, Pléiade, 1971, p.32
- 7) Ibid., p.71
- 8) Jean-Yves Tadié; *Proust et le roman*, Gallimard, 1971, p.380
- 9) *Correspondance de Marcel Proust*, XVI, Plon, 1988, p.87

- 10) Ibid., II, 1976, p.55
- 11) Ibid., III, 1976, pp.269-270
- 12) Ibid., XIV, 1986, p.146
- 13) Albert Feuillerat; *Comment Marcel Proust a composé son roman*. (Réimpression de l'édition de Paris, 1934), Slatkine reprints, Genève, 1972, pp.156-160
- 14) この召使いの手紙について、天野由紀代氏は、「ここでは作者による召使いの文体の模写と、結果はどうかあれ召使いによる詩的な文体の模写という二重の模索が見られる」とし、なぜゲルマント公爵夫人宅でのサロンとそれに続くシャルリュス訪問の後にこのエピソードが位置づけられているかについて、それは「召使いの世界は社交界をなぞるといふ、物語のレベルでのもう一つの模倣を示唆する」ためとしている。(『プルースト全集16・書簡I』月報、筑摩書房、1989、pp.5-7)
- 15) Céleste Albaret ; op.cit., p.245
- 16) Luc Fraisse; *Proust au miroir de sa correspondance*, Sedes, 1996, p.133
- 17) Alain Buisine; op.cit., p.10 ビュイジヌはこの本の中で、例えば「気送速達pneumatiqueは他のどんな伝達手段よりもプルーストにふさわしい」(p.62)など、いくつかの興味深い指摘をしてはいるが、結論的に「プルーストは普通の作家と違って、”母に向き合った作家” écrivain-à-la-mèreである」(p.127)、さらに「このロマネスクな作品全体は、母への手紙の残りとして書かれている。」(p.127)とまで言い切られると、飛躍を感じざるを得ない。

Resume

Marcel Proust aimait la correspondance par letter, tellement qu'il en a écrit six mille environ pendant toute sa vie. Comme l'histoire de son roman, *A la recherche du temps perdu*, reflète énormément sa vie, il n'est pas étonnant voir les lettres y jouer un rôle important. Généralement, il arrive beaucoup que les lettres soient utilisées afin d'introduire ou de clôturer le roman, et afin d'y apporter éventuellement un changement. Par contre, les lettres dans l'oeuvre proustienne n'ont aucunes relations avec la structure et l'histoire du roman. Non seulement elles n'arrivent pas à l'heure, mais elles ne transmettent clairement aucun message, puisque dans certain cas, il arrive même que les destinataires camouflent la vérité. Ce rôle joué par les letters représente chez Proust le décalage dans les relations humaines. En d'autres termes, les lettres proustiennes sont un symbole des difficultés qu'on rencontre dans la communication avec autrui.